

釧路市教育委員会 令和5年第8回4月定例会会議録

1 日時：令和5年4月18日（火）13時30分から15時00分まで

2 会場：釧路フィッシャーマンズワーフMOO 2階 教育委員会室

3 出席者

岡部義孝教育長

（教育委員）

山口隆委員、種村俊仁委員、小出美貴子委員、靱山彩子委員

（事務局）

齋藤学校教育部長、工藤生涯学習部長、本川教育指導参事、森学校教育部次長、大島総務課長、西崎施設計画主幹、小西教育政策主幹、齊藤総括指導主事、神谷給食担当主幹、及川北陽高校事務長、澤口生涯学習部次長、塩田美術館長、乙黒スポーツ課長、長谷地音別生涯学習課長

4 議事録署名人 山口委員、靱山委員

5 傍聴人数 0人

6 提出案件

【公開案件】

報告事項

- (1) 令和5年度小中学校児童生徒数等の状況
- (2) 令和5年度北陽高等学校入学生等の状況について
- (3) 令和5年度釧路市における学校指導（1次訪問）について
- (4) 釧路市コミュニティ・スクールの導入について
- (5) 令和5年度釧路市奨学生の決定について
- (6) 第64回北海道学校給食研究大会の開催について
- (7) ゴールデンウィーク中の生涯学習施設の開館等について
- (8) 令和5年度市立美術館事業について

7 会議内容

【公開案件】報告事項

- (1) 令和5年度小中学校児童生徒数等の状況
- (2) 令和5年度北陽高等学校入学生等の状況について

(森学校教育部次長)

報告事項1、令和5年度小中学校児童生徒数等の状況について報告する。

今年度の新入学児童生徒の状況について、小学校1年生は前年より63名少ない946名である。また、中学校1年生は、前年より6名少ない1,109名となっている。次に、市立小中学校全体の児童生徒数の動向については、すべての学年において減少している。小学生の合計人数は、前年度の6,400名より266名減の6,134名、中学生の合計人数は、前年度の3,502名より154名減の3,348名となっている。特別支援学級在籍児童生徒については、小学校、中学校とも、毎年増加傾向にあり、小学校では617名、中学校で223名となり、合計で前年より70名多い、840名となっている。

このほか、附属釧路義務教育学校 前期課程の1年生は56名、後期課程の1年生(7年生)は105名となっている。なお、今回の集計は4月1日現在のものであり、今後、学校基本調査等で使用される、5月1日を基準とした報告値においては、若干の増減が生じることが見込まれる。

参考として、市立小中学校における児童生徒数の10年間の推移と、平成26年度の児童生徒数を100とした場合の各年度の割合をまとめた表を記載した。特別支援学級の児童生徒数は10年前と比較すると、小学校においては約2倍、中学校においては、約1.5倍と増加している。児童生徒数の合計について比較すると、小学校が平成26年度で8,165人であったものが、令和5年度で6,134人となり、2,031人の減で、約25%減少している。また、中学校が平成26年度で4,089人であったものが、令和5年度で3,348人となり、741人の減で、約18%減少している。

(及川北陽高校事務長)

報告事項2、令和5年度北陽高等学校の入学生等の状況について報告する。

はじめに、令和5年度の新入学生数について、定員200名に対し、合格者は200名、このうち1名が辞退し、入学者は199名となった。この内40名は、推薦の合格者となっている。

次に、新入学生を含めた4月11日現在の在校生数は、569名となっている。

続いては令和4年度卒業生の進路状況で、進学については、希望者152名に対し148名が決定し、進学決定率は97.4%となっている。就職については、希望者44名に対して44名全員が決定している。なお、進学決定者の学校別内訳及び就職決定者の就職先の地域区分は、資料に記載のとおりとなっている。

◎この報告について、各委員から次のとおり発言あり

(山口委員)

北陽高校の2年生3年生の在籍数であるが、3年生は176名ということで、現3年生が入学の時の定数も200名であると思われるが、そうするとマイナス24名というのは、退学されたと認識してよろしいのか。

(及川北陽高校事務長)

現在の3学年については定員割れがあり、入学者数自体が186名と、もともと少ない人数であった。1年次から2年次に上がった段階で、さらに7名減ということで179名になり、今回3年次に上がって3名減で176名となった。在校者数が減少している主な理由としては、通信制高校へ転学する生徒が増えてきている。近年、通信制高校への入学者は全国的に増加傾向にあり、通信制高校の情報に身近に接する機会が増えている状況である。全日制高校の生活になじめなくなった生徒が自分のペースで学習して学校生活を送ることができるといった理由で通信制高校に転学するケースが出てきている状況であり、その傾向を受けて在校生数が減少していると把握している。

(岡部教育長)

市立高校だけを考えるのではなく、道立高校も含めて、この釧路学区の状況というものを把握しなくてはいけない。釧路教育局が高校の適正配置に関する会議を持っているが、来年度令和6年度に釧路管内で4間口減ると決まった。次の学年から4校で計4間口減る。湖陵、明輝、商業、東、が一クラスずつ減る。併せて令和9年、10年になると、さらに釧路管内で5から6間口減らさなくてはいけないシミュレーションになっている。そのため、北陽だけが通信制に行くという分析ではなく、管内トータルで見えていかないと、この問題は見誤る。

(山口委員)

道立高校の件で、ここで話しても仕方ないことであるが、各公立高校の推薦入学の募集状況が一覧表で出たときに、各他管のナンバーワンの学校、例えば帯広柏陽、小樽潮陵、岩見沢東などは推薦を取っていない。ナンバーワンの学校で取っているのは湖陵だけであるため、一覧表を見ると湖陵だけランクが下がったようなイメージを私は受けた。湖陵はどのような認識でいるのか気になる。

(岡部教育長)

湖陵は2年前から普通科も含めて推薦入学を導入している。それは釧路学区全体の分母と分子のバランスによるものである。令和6年に4間口減らすが、まだ間口的にはだぶついている状況にあり、湖陵としてもいろいろな策を講じていかななくては定数を確保できない。選ばれる高校でなくては生き残れない状況が釧路学区については非常にあるため、そこを含めて、北陽もより特色化・魅力化を図りながら、湖陵でもなく江南でもないものを目指していく必要がある。

(種村委員)

小中の生徒数がかなり減ってきている。私の知る限りでは、20年くらい前にダイレクト

メールを送ると、中学校だけで1万通以上であった。それと比べると本当に隔世の感を感じるが、この減り方というのは今後もそういう傾向があるのか。

(森学校教育部次長)

5年間の推定値を毎年出しているが、減っていく。増えることはないという状況である。

(種村委員)

それは釧路市内においても転出等に関係なく、子どもを産む数が少なくなっているからということか。

(森学校教育部次長)

推定は、住民基本台帳に基づき推定値を出していくが、その地域にいる0歳児、1歳児、2歳児、3歳児の数自体が少ないという状況。

(岡部教育長)

去年、釧路市がめざす学校の姿基本計画の中でも数字を出しているが、釧路で生まれた子が6歳になったときに小学校入学するのが何人いるかというシミュレーションをしている。そこでは、単に転じて札幌に行く、東京に行くというのは考慮されていない。あくまで釧路で生まれた子どもが、釧路の学校に入るとしたら、どの年に何人というシミュレーションしできない。厳しい状況だと思う。

【公開案件】 報告事項

(3) 令和5年度釧路市における学校指導（1次訪問）について

(齊藤総括指導主事)

報告事項3、令和5年度釧路市における学校指導（1次訪問）について報告する。

学校教育指導は、私たち指導主事の本来業務として位置付けられており、市立学校を訪問し、教育課程や学習指導、生徒指導、その他の学校教育に関する専門的事項について指導・助言を行う大切な機会である。

これまでは、北海道教育委員会が行う学校教育指導の実施要項のとおり、釧路教育局の指導主事とともに、毎年学校訪問を行ってきたが、コロナ禍や働き方の観点等、様々な理由により、年1回の訪問となっていた。令和4年度に「釧路市が目指す授業の姿」を学校に示し、全市教職員が一丸となって、この授業を目指す必要があることから、北海道教育委員会が提示している年1回の学校訪問以外に、昨年度同様、早い時期に学校に足を運び、実態を把握した上で、指導・助言を行っていくこととした。

今年度は一次訪問の際、釧路教育局指導主事も同行し、指導助言を行うことで、2回目以降の資料作成の手間を省くとともに、釧路市が目指す授業の姿に関して指導助言をいただくよう、調整を行った。この一次訪問の一番の目的は、すべての先生方の授業を参観すること、校長先生の強いリーダーシップのもと、「釧路市が目指す授業の姿」の実現に向けて、教職員の資質向上を図ることにある。授業を参観した上で、授業改善を軸とした校内研修体制の確立に向けて、学力向上をはじめとする、様々な教育的諸課題について具体的な協議を学校と

行いたいと考えている。

◎この報告について、各委員から次のとおり発言あり

(山口委員)

非常に良い計画で、年々充実してきている印象を受けた。訪問の際に個々の先生の授業改善、スキルアップを図るために指導・助言したいということであったが、今年度の釧路市の教育はさらにバージョンアップして、これを見ただけで自分はどのようにしたらよいか、どのように授業に取り組めばいいかということが具体的に書かれており、素晴らしいものができたと思う。これが学校現場でどのように活用されているのかというのが最大の課題であるため、指導主事の訪問の際に、これがどのように活用されているか、ぜひ活用して欲しいということを指導助言に付け加えていただきたい。

【公開案件】報告事項

(4) 釧路市コミュニティ・スクールの導入について

(森学校教育部次長)

報告事項4、釧路市コミュニティ・スクールの導入について報告する。

令和5年度4月1日から、新たに小学校3校と中学校1校でコミュニティ・スクールが導入され、これにより市内全域の導入校数と導入率は、小学校が19校で73.1%、中学校が8校で53.3%となった。未導入校のうち小学校1校、中学校3校において令和6年度の導入に向けた推進委員会が継続されており、今年度も新たに小学校3校、中学校1校で推進委員会の設置が予定されている。

調査研究期間内においては、「目指す子供像」の設定と実現に向けて、地域住民や保護者、教職員等で構成されるコミュニティ・スクール推進委員会により、協議を重ね、学校運営に地域の声を生かし、特色ある学校づくりを進めていくことを目指していく。

今後のコミュニティ・スクールの導入については、これまでの取組において学校と家庭、地域との連携や小中学校間の連携の強化が図られたことなどを踏まえ、第3期教育推進基本計画の最終年度となる令和9年度には、全ての学校への導入を目標としており、今後もコミュニティ・スクールを中心に、地域学校協働活動を推進していきたいと考えている。

◎この報告について、各委員から次のとおり発言あり

(山口委員)

地域学校協働本部事業によるコーディネーターの配置ということで、市教委には統括的な地域学校協働活動推進員、各学校には地域学校協働活動推進員という記述があるが、コミュニティ・スクールになっている学校でも、中央小学校のように小出委員も担っている地域学

校協働活動推進員が配置されている学校と、されていない学校が現存している。これはコミュニティ・スクールになった全ての学校に地域学校協働活動推進員が配置されると受け止められるが、そのあたりの状況は今年度どのように考えているか。

(本川教育指導参事)

地域学校協働本部事業、コミュニティ・スクール、小中ジョイントプロジェクトに係る小中連携においては、地域学校協働活動推進員が担う役割は非常に大きいものだと、教育現場にいて実感していた。コミュニティ・スクールが機能し、より成果を上げていくコミスクの多くは、全てではないが地域学校協働活動推進員を配置している。したがって、地域学校協働活動推進員を各コミスクで配置したく探しているが、コミスク委員とは違った意味で、適任の地域学校協働活動推進員が見つかりにくいというのも現状である。現場でもそれぞれ探しているが、今後も教育委員会と連携して考慮しながら、地域学校協働活動推進員が配置できるように教育委員会としても働きかけていきたいと考えている。

(山口委員)

参事の説明を聞いて、同感できる部分がある。人材発掘が非常に難しい。とりわけ地域学校協働活動推進員が配置されている学校はすべて小学校で、コミスクになっている中学校で地域学校協働活動推進員を配置する場合、どのような人材が適任か非常に難しい。小学校で地域学校協働活動推進員をしている方が、繋がっている中学校の地域学校協働活動推進員を兼ねる、あるいは、連携を図って中学校の方でも地域学校協働活動推進員の役割を果たしてもらうというようなことも含めて検討していかなければ、中学校単独で地域学校協働活動推進員を人材発掘して役割を果たしてもらうのは難しい気がする。学校現場と連携しながら前進できるようにお願いしたい。

(小出委員)

コミュニティ・スクールについて、同じ校区の小中学校がコミスク導入する方向に行っていると思うが、景雲中学校が最後まで未実施の予定で、同じ中学校区の小学校は順次コミスクになっていくように書かれているが、景雲中学校は計画もないということか。

(森学校教育部次長)

毎年3校から4校ずつ導入している。今後、義務教育学校になることが確定している学校から順番に導入していく予定としているため、景雲中学校は後半で導入予定となっている。

(小出委員)

小学校と中学校がコミスクになって繋がったことで、小学校だけで活動していた時との連携の違いは何かあるか。

(本川教育指導参事)

山口委員からのご指摘と重複するが、コミュニティ・スクールの最もよい在り方を実践しやすいのは小学校で、いろいろな活動にタイアップしてできる。中学校のコミスクの導入が遅れてきていることもあるが、中学校の教育活動の中でコミュニティ・スクールの最大限の良さを発揮するのは小学校とは別の面だと認識している。今後、中学校においてコミスクの活性化が図られている他地区の様子等を研究し、釧路市でより良い中学校におけるコミスク

の在り方を探りながら中学校を活性化していきたい。また、小学校と中学校で中身は違うが、現在も校区でそれぞれ近隣校の校長が入っていたり、学校運営協議委員については単独校一校の任命しかできないが、法的にコミュニティ・スクール推進委員については2つ3つのコミスクを兼任することが認められている。実際そのようにしている方もいるため、ジョイントプロジェクトに応じた中学校区の小学校と中学校でコミスクの上でも連携をより一層深めて参りたい。

(靱山委員)

先ほど成果が挙げられていると言っていたが、成果というのは具体的にどういったことなのか教えていただきたい。

(齊藤総括指導主事)

具体例でいうと、昭和小学校区の中ではキャリア教育に特化してジョブカフェというものを行っており、近隣の保護者や地域住民の方々にご協力いただいている。中学校においてはそれがより重要になっていくと思うため、中学校と小学校同じ校区内で一体的に取組みが進めば、教育活動の中で一体化されているということにより成果として挙がっていくと具体的には考えている。これからそのような仕組みも進めていきたい。子どもたちの教育活動が充実することが一番の成果だと思う。そのような環境を作りつつ進めていきたいと考えている。

【公開案件】

(5) 令和5年度釧路市奨学生の決定について

(森学校教育部次長)

報告事項5、令和5年度釧路市奨学生の決定について報告する。

釧路市奨学金貸与制度は、昭和29年に始まり、令和4年度までに延べ3,291名に奨学金を貸与している。最初に令和5年度の奨学生の募集人数及び応募状況について。なお、貸付の財源の違いから、釧路・音別地区と阿寒地区の2つの地区に分けて報告する。

まず、募集人数について、釧路・音別地区5名、阿寒地区4名、合計9名に対し、応募はなかった。カッコ内の調整後の数字については、後ほど説明する。次に、2.高等専門学校については、募集人数が釧路・音別地区2名、阿寒地区2名、合計4名に対し、釧路・音別地区で1名の応募があった。3.専修学校・大学(短大・大学院を含む)については、募集人数が釧路・音別地区35名、阿寒地区6名、合計41名に対し、釧路・音別地区で44名の応募があった。阿寒地区は応募がなかった。4.釧路市全体としては、募集人数54名に対し、45名の応募となっている。

次に、選考について、去る3月29日に開催された釧路市奨学審議会において、学業・人物・身体および家計の状況などから総合的な審議を行い、奨学生を選考した。選考にあたっては、より多くの応募者へ貸与できるよう、審議会の了承を得た上で、応募人数が募集人数に満たない学校区分の採用枠を、予算の範囲内で別の区分に振り替える調整を行った。その結果、今回、応募がなかった1の高等学校区分のうち、釧路・音別地区の5名分を、募集人

数を超えて応募があった3の専修学校・大学区分の中の釧路・音別地区に振り替え、釧路・音別地区の専修学校・大学区分の採用枠を2名増やし、35名から37名とした。なお、阿寒地区については、前田一步園財団様からのご寄附が原資となっており、寄附者のご意向により、阿寒地区以外への振り替えができないため、採用枠の調整は行っていない。

続いて、審議会での選考の状況を報告する。学業基準について、3年間の評定平均が3.0以上という選考基準に満たない方が2名おり、選考対象から外しての審議となった。人物・身体において選考基準に満たない方はいなかった。年齢について、原則、学校卒業後に社会人としての期間を置かずに進学する者を優先していることから、23歳以上の者について、特別審査の対象としており、今年度は釧路・音別地区の専修学校・大学区分から2名が特別審査の対象となった。また、審議会終了後に辞退を申し出た方が2名いた。

以上、奨学審議会における審議および答申に基づく採用決定者は、高等専門学校1名、専修学校・大学（短大・大学院含む）は、特別審査対象者を含めた37名となった。釧路市全体としては、応募者45名のうち、38名が決定、3名が補欠となったところである。その後、本日までに採用決定者全員が手続きを行うことが決定したため、補欠の3名については、結果、不採用というかたちになった

◎この報告について、各委員から次のとおり発言あり

（岡部教育長）

選から漏れるのは相当久しぶりだとは思いますが、そのあたりはどのような分析をしているか。

（森学校教育部次長）

前回、不採用が出るほどの募集があったのは平成27年で、その後は枠内で収まり、不採用になるほどの応募がなかった。今年はそれを上回る応募があったということで、経済的な問題なのか、情勢なのかは分からない。

（岡部教育長）

現在の物価の状況や、コロナ禍による保護者の状況なども含めて少し掘り下げてみる必要があるかもしれない。

（山口委員）

今年のように3.0をクリアして審査した結果、3名補欠で他は手続きが終わったため、補欠の3名の方は不採用になってしまったことは残念であった。寄附者のご意向があり、阿寒地区と別枠で釧路・音別地区をやってきたが、子どもたちのことを考えたときに、阿寒地区の応募者がおらず財源そのまま使わなかったものを、なんとかこちらの方に活用させてもらえないのか。させてもらえればこの3名の方も救えたのではないかと。前田一步園財団への働き掛けも今後考えていけないかなという希望がある。

（岡部教育長）

以前にこの教育委員会の場でも議論あったのが、この奨学金の決定の時期についての問題

で、釧路市の奨学金の決定の時期は遅いということ。遅いというのはどういうことかということ、いろいろな給付型の奨学金が決まって最後に残っているのがこの奨学金である。そのため、これに落ちるといのは厳しいと思う。今後、何か工夫ができるのであれば検討が必要かと思う。

(齋藤学校教育部長)

決定の時期、相手先から受けた資金の用途含めてご意見いただいたが、この制度自体を利用しやすくするにはどうしたらよいかということ、令和5年度の中で検討していく。

【公開案件】報告事項

(6) 第64回北海道学校給食研究大会の開催について

(神谷給食担当主幹)

報告事項6、第64回北海道学校給食研究大会の開催について報告する。

令和5年7月28日金曜日に釧路市生涯学習センターで開催する「第64回北海道学校給食研究大会」は、学校給食の意義と役割について認識を深め、学校・家庭・地域が一体となって児童に対する食に関する指導の在り方や、学校給食の当面する課題について研究協議を行い、食育の推進及び学校給食の充実を図ることを趣旨とし、毎年、全道各地で開催している大会である。

大会の開催へ向けて、今後2回程度の実行委員会を開催する。第1回の実行委員会は今月25日、13時30分から釧路市生涯学習センター703号室で開催される。その実行委員会の中で開催要項(案)等の詳細を決めていくことになるが、大会内容としては、学校給食に顕著な功績のあった方への「表彰式」、講師を招いた「基調講演」、学校給食のそれぞれの課題について研究発表を行う「分科会」、給食関連業者が行う「展示」を予定している。参加対象者は、学校教職員、学校給食調理現場職員及び関係者、教育委員会職員、児童生徒の保護者などで、約300人程度の参加を予定している。

◎この報告について、各委員からの発言なし

【公開案件】報告事項

(7) ゴールデンウィーク中の生涯学習施設の開館等について

(8) 令和5年度市立美術館事業について

(澤口生涯学習部次長)

報告事項7、ゴールデンウィーク中の生涯学習施設の開館等について生涯学習課より一括して報告する。

4月29日から5月8日までの各施設の開館状況においては、資料のとおりであるが、期

間中、湿原の風アリーナ釧路、動物園、丹頂鶴自然公園などでは、休まずに開館する。

ゴールデンウィーク期間中の主な行事として、釧路市立美術館では、現在開催しているコレクション展「ペキタとめぐる！アートの旅」に合わせ、4月29日（土）と30日（日）の2日間、子ども向けのイベント「ペキタ工作広場」を開催する。こども遊学館では4月29日から5月5日まで「ゴールデンウィークイベント2023木のおもちゃをたのしもう！」を開催し、小中学生の展示室観覧料が無料となる。中央図書館では、「春のお話し会」や「祝日上映会」、湿原の風アリーナでは、5月4日から6日まで「こどもアリーナ」を開催し、子どもと保護者1名の入場料が無料となる。

博物館では、体験や工作を通じて楽しく学べる「博物館で遊ぼう」を5月3日から5日まで、北斗遺跡展示館では「堅穴住居で屋根ふき体験」を6日に開催する。また、松本堅一氏から北海道産オサムシ標本コレクションが寄贈されたのを記念して、企画展「北海道のオサムシ～松本堅一コレクション展～」を、博物館1階マンモスホールで開催中である。なお、5月5日のこどもの日は、市内の小中学生の入館料が無料となる。

動物園では、4月29日～5月7日まで、春の動物園まつりを開催する。このうち、5月4日と5日には、動物のこどもにちなんだクイズラリーを実施したり、5月6日には、クジャクの羽を使った、自分だけのストラップを作ったりと、子どもたちに人気のあるワークショップを行う。

（塩田美術館長）

報告事項8、令和5年度市立美術館事業について報告する。

今年度は、現在開催しているコレクション展「ペキタとめぐる！アートの旅」を皮切りに7本の展覧会の開催を予定している。このうち、特別展の3本について、日程などを紹介させていただく。

1本目は、こどもが楽しめるしかけ絵本を紹介する「美術館で体験！しかけ絵本の世界」を5月20日（土）から7月2日（日）まで開催する。

特別展2本目の「いきもの会議」は、道東出身の3名の作家による企画で、それぞれが異なる素材と技法で生み出すいきものたちを紹介する展覧会となっており、7月15日（土）から8月27日（日）まで開催する。

特別展3本目「遠藤彰子展」は、現代日本を代表する具象画家・遠藤彰子氏の展覧会で、迫力のある巨大画等を展示する予定となっており、9月3日（日）から10月22日（日）まで開催する。

以上が特別展の日程等となるが、その他、美術館で開催する事業としては、「道展・釧路移動展」や「釧路郷土作家展」、阿寒・音別地区での美術館所蔵作品の公開などのほか、今年度は美術館の協力団体である「釧路市立美術館アートギャラリー協力会」の設立30年を記念したイベントが8月1日（火）に予定されている。

◎この報告について、各委員からの発言なし